

兵庫昆虫同好会の25周年を祝う

奥谷 禎一

昨年機関誌“きべりはむし”24巻2号が送られてきて、編集者高橋壽郎氏より今年25周年を迎えるので一言とのことでした。まず本会が25年も続けられたのは、同士のなみなみならぬご努力の賜物と深い感謝と共に厚くお礼を申し上げる。

この同好会の始まりは、昭和26(1951)年末に筆者が篠山の兵庫農科大学に赴任し10年ほど経て兵庫県の虫事情も少し分かりかけた頃、兵庫農業試験場の山口福男氏が、時々大学に立ち寄られ、いわゆる南方系害虫ミナミアオカメムシやサンカメイガの北進の話があり、チョウやガあるいはトンボといった虫屋の目に付きやすい昆虫類にそのような傾向はないだろうか、県下の多くの虫屋から記録を寄せてもらい情報交換はできないだろうかなどという事で、“兵庫虫の会”を旗揚げしてみようじゃないかと相談された。その後旗揚げでは情報はこうして生かされるという事を見せる形がよいのではとなり、1966(S. 41)年に県下の虫屋ばかりでなく農業改良普及員にも呼び掛け、ゲンジボタルの分布情報を集めてみた。その結果は山口氏と相談して取り纏め、“昆虫と自然”2巻3号に“兵庫県下のゲンジボタルの現況と問題点”と題して投稿した。その後筆者は留学し、留守中に大学は国立に移管し灘区六甲台に移転し、帰朝後は大学紛争に明け暮れ虫の会はお預けになってしまった。その後は自然保護運動に手を貸し、昭和45年兵庫県自然保護協会が設立され、多少の時間的余裕ができ、山口氏とも連絡が取れ再び虫の会設立をということになった。大体の話はまとめ、事務局問題では大学中心で運営されている地方同好会も多いが、大学人事では何時までも分類生態関係の教授が保証されているわけではないので、できればアマチュアで長く続けることが望ましいと

いう私見によって、兵庫県の虫屋といえばこの方しかないという高橋壽郎氏にお願いした所、快諾されお引き受け下さり今日まで続けられた次第である。先年からは後継の高島・近藤両氏に編集を託されるという万全の手配までして頂き、心からお礼を申し上げる次第である。

ようやく長年の念願であった自然系の博物館もでき、昆虫類の生息状況が環境指標の一つとして重要な意味を持つことがわかり始めた。ナガサキアゲハの北進も地球温暖化の指標の一つであろうと考えられるし、まとまった報告や論文でなくても書き残してあればきっと役に立つとの信念を持ってこの同好会を育てていきたいものと念願している。これからはコンピューターの時代で情報さえ入手できればという時代ではあるが、ディスクはウィルスに犯され消えることもあり印刷物は永久に残るものである。筆者は家庭の都合でやむなく転居したので、すっかり兵庫県の情報に疎くなり、先年の震災でさえ1年近くも経って被災されたことを知った方があり申し訳ないことをしたと悔やんでいる次第であるが、同好会の被害は比較的軽微であったようで、こんな地震には負けまいと直後の5月に23巻1号が、さらに年末には高橋氏の原著が3号として送られてきて大いに心強く思った。

生物の多様性が問題となる今日、次々と消えて行く虫たちの碑を建てることは悲しいが、会誌“きべりはむし”がその碑とならないことを願うと共に益々発展し、環境指標の一つの支えとなることを祈り、お祝いの言葉としたい。

(OKUTANI TEIICHI 埼玉県川越市霞ヶ関北町1丁目20-14)